



[事例報告]

道後の観光まちづくりのための
空間整備戦略

道後温泉旅館協同組合
副理事長 宮崎 光彦



歴史漂う景観まちづくり宣言。百年の景

道後には、7室から125室までの多様な旅館があるほか、特質すべきは、道後温泉本館は国の指定文化財唯一の銭湯ということですが、それを中心とした回遊文化があるということです。また、旅館と商店街が連携して、街あるきの楽しさを創出するための様々な取り組みを行っているところです。三千年の歴史を誇る日本最古、かつ、都市型の温泉郷で、県庁・市役所まで約2キロという温泉地は全国で類を見ないと思います。

道後温泉は、歩いて頂くとわかると思いますが、若い方やビジネス客、教育旅行の生徒さんも増えています。少子高齢化と人口減少社会の中で、どのようにお客様を確保していくかという、4点しかありません。

新規のお客様、そしてリピーターの確保。滞在時間の拡大。外客融資です。その中でも各旅館やホテルの商品力の価値向上と、そして地域の魅力づくりがないとこれが成立しない。そういう意味でまちづくりというのは非常に大事になってきています。地域密着、旅館ホテルを街の一員にしていこうと。そして観光地の満足度が旅館満足度に加算されるというような発想でまちづくりを進めていくべきだろう

と思っています。

空間整備戦略については、街の生活ゾーンからのさらなる魅力が市場価値を高め、観光産業、交流文化産業発展の母体となるということです。観光というのは成長戦略の7つのうちの一つになっていますが、民間が主導で頑張るということで、こういった美しく魅力的でかつ都市型温泉郷文化の実現を目指して、平成18年度に「歴史漂う景観まちづくり宣言。百年の景」を策定しました。



「歴史漂う景観まちづくり宣言。百年の景」
(出典:道後温泉誇れるまちづくり推進委員会より)

地元と行政が一体となった観光まちづくり

組織としてはまちづくり推進協議会というのを立ち上げています。平成4年8月に立ち上げて以来、様々な活動を行ってきました。最初のうちは理論中心でランドデザインの策定に取り組み、その中で坊ちゃん列車が平成13年に動き始めました。目に見えた成果の一つです。平成19年3月には本館の周辺がガラリと一変しました。また、平成21年3月には、地域が主体となっていたファサード整備事業が完了しました。

こういう活動を単なるまちづくりごっこで終わらせないように、景観整備、空間整備を4本の柱で進めていっているところです。

1点目は、屋外広告物の自主撤去。2点目は、歩行者優先空間の創出。3点目はファサード整備。4点目が景観計画の策定というように言えるかと思います。

屋外広告物の撤去については、周辺整備の活動への共感のもと、自主的に撤去していただきました。かなり大変な撤去だったと思いますが、これで本館周辺の景観がガラッと変わったということです。

2点目が歩行者の優先空間の創出ということです。本館前の整備前は、車が溢れていたり、新殿のところが非常に狭かったりという問題に対して、これを変えていこうということで、整備いただきました。また、駅前についても、整備により歩行者空間が広がりました。

地元地域では、周辺のファサード整備を進めていこうということで、協議会が主体となって地域住民の方に説明して、支援金を用意したりするなど仕組みづくりも行いました。

ファサードを整備しながら景観計画の導入に向けた取り組みも行ってきました。市のサポート、応援をいただきながら、平成22年3月に景観計画の策定にこぎつけたということです。まず業界で地域のまちづくりを進めていこうということでやっています。



道後温泉本館



道後温泉駅前

景観に配慮した道づくり

もう一つの空間整備とは、歴史的な施設の復元をしていこうということで、今、第3のプロジェクトの最優先としては、「太子の湯」です。596年に聖徳太子が来られて17条の憲法を考えて、冠位十二階の制度を道後の湯につかって発想したと言われています。

例えば、古代の湯、太子の湯、斉明天皇が来られた女帝の湯など、今後は歴史的な物を復元していこうと考えています。



「太子の湯」の建築イメージ

空間的にはハードだけではなくて、湯巡りや、様々な活動を展開している足湯・手湯巡り、あるいは旅館の内湯巡りなど、お客さんに外に出て楽しんで頂こうということで考えています。まち歩きもそうだと思います。ボランティアガイドの方も道後で100名を超えています。地域内でまち歩きガイドツアーや、旅館でも商店街でも使える共通のチケット、商店街のお買い物券というものを協同で展開しているところです。

交通の整備としては、伊予鉄道さんのご協力を得て、坊ちゃん列車のセットクーポンや、市内電車のセットクーポンなども行っているほか、オープントップのスカイバスの運行も四国で初めて3年前にオープンしました。

そして今売り出し中の松山ハイクというのがあります。当初は9コースだったのですが、どんどん展開しており、お城下と道後を結ぶコースなど、歩くからこそ楽しめるというコースもあります。

昨年度は、エコモビリティということで、電動自転車とEVカーの実証実験も行いました。

一方で、これが道後温泉かと言われるような状況のところもまだあります。そして駐輪場、駐車場の問題、地域住民との新しい関係づくり、道後温泉本館の改修工事に向けた対策など、問題は山積しています。今後の目標としては景観というのはハードだけではなくて、やはり一生面倒を見ようとするのが一番大事だろうと思います。おもてなしの気持ちを形にするというようなこと。そして出来るだけ歩いたり動いたりゆっくりするような滞在時間の延長、地域の人との交流が図れるような時間を確保すべきだろうと考えています。

今、我々は先人の財産を食いつぶしているのではないかというふうな反省をもとに、さらなる空間整備を進めていきたいと思っています。



将来都市構造

松山が目指す都市のイメージを都市構造図として表しています。



[事例報告]

松山の都市計画マスタープラン

松山市都市整備部都市政策課
副主幹 石井 朋紀



集約型都市の実現に向けて

都市計画マスタープラン、という言葉聞き慣れない方が多いと思いますが、概ね20年後の松山をどのようなまちにしていくのか、ということを決めた計画のことです。特に、全体の土地利用をどうするのか、交通はどのような基本体系が良いのかなど、20年後を見越して計画するというのが都市計画マスタープランです。

今回策定したマスタープランについて、特に何が異なるのかというと、これまでは人口が増加していく中で計画を考えていたものが、今後は、人口が非常に減少する、高齢者の割合が非常に増加するということを考えていかなければならないということです。

その中で目指すべきまちの方向というのは、コンパクトなまちがやはりいいだろうと。これは一般に集約型と言われるもので、拠点とか中心地に出来るだけ人口を集めて、その中で質の高いサービスを提供するという方が市民の方の満足度も得られるし、行政側のコストも削減できるなど、一石二鳥であるということで、集約型の都市ということを目指すことにしております。

集約型の都市にしていく際に、拠点となるのは、例えば、駅の周辺や沿道、中心部など、既存のストックがあるところ。そこに集約させましょう、というのが今回のマスタープランの主な考え方です。

集約型都市にしていくことは、他の都市のマスター

プランにも謳ってはいるのですが、なかなかそれを具現化する方法というのを、どこの都市も出せていない、というのが現実です。これには4つのポイントがあると思います。

1点目は、住む人、どういう人を中心とした街にしていくかということです。

2点目は、後ほど野志市長と羽藤先生とのトークの中に発言があるかもしれませんが、都市空間というもの如何に設えていくか、その中で歩行者や自転車といった遅い交通をどうしていくのかということです。交通弱者や高齢者が多くなりますので、そういう方を対象として、どのように設えていくかということです。

3点目は、先ほどの野原先生の基調講演でも話がありましたとおり、歩きたくなるようなまちづくりはどのようなデザインがいいのかということです。

最後の4点目は、市民参加ということです。

このポイントのうち、2～4点目については、どの都市でも言葉では謳っていますが、なかなか実現出来ていないというのが実態であることから、この辺をどのようにして具体的な事業にしていくのかということについて、この後の野志市長と羽藤先生とのトークにおいて、導き出してくれるのではないかと思います。